

2024年4月28日復活節第5主日説教

申命記4章32－40節

使徒言行録8章26－40節

ヨハネによる福音書14章15－21節

本日の旧約聖書は、申命記4章です。『聖書』の小見出しには、4章の初めに「モーセの勧告」とありますが、15節から40節には「偶像礼拝に対する警告」とあります。そのあとの部分には「逃れの町」（申4：41-43）とあり、続いて「律法の前書き」（申4：44-49）とあり、5章から「十戒」に入ります。「逃れの町」の部分だけ少し浮いていますが、本日の箇所は、十戒を代表する律法全体の前書きの部分です。すなわち、主なる神様が与えられた律法という法と掟を、どのように受け止めるのか、そして、どのように守るのかについて、その心構えが書かれています。

初めに「あなたに先立つはるか昔、神が地上に人間を創造された最初の時代に遡り、天の果てから果てまで巡って、尋ねてみるがよい。これほど大いなることが起こったであろうか。そのようなことを聞いただろうか」

（申4：32）とあります。申命記の語り手はモーセです。この部分からモーセが「創世記」の冒頭にあるような事柄、すなわち主なる神様が天地創造の方（ここでの言及は人についてだけですが）と前提していることがわかります。歴史的にモーセが、現在わたしたちの持っているような「創世記」を読んでいたかどうかは不明ですが、律法について語り始めるモーセが、単に神様・神的存在と漠然ととらえているのではなく、天地の作り主なる主なる神様ととらえているということが大切です。また「火の中から語られる神の声を聞き、なお生きているあなたのような民があったであろうか。」（申4：33）とあります。この部分は、そのあとに続く十戒授与の後、5章24節などの内容を思い出させる記述のため、前後関係が混乱しているようにも思えますが、それらすべてを振り返ったまとめとしての心構えとしてとらえるべきでしょう。

本日の箇所の最後でモーセは、「あなたは、今日、上の天においても下の地においても主こそ神であり、ほかに神のいないことをわきまえ、心に留め、今日、わたしが命じる主の掟と戒めを守りなさい。そうすれば、あなたもあなたに続く子孫も幸いを得、あなたの神、主がとこしえに与えられる土地で長く生きる」（4：39-40）と語ります。しかし、モーセ自身は、人間の目からみ得れば、ほんの些細な、戒めを破ったために、カナンの地には入ることはできませんでした。それは民数記20章1節から13節にある有名な「メリバの泉」の出来事の故です。申命記自体にはその物語の記述はありませんが、申命記の32章に「あなたがたがツィンの荒れ野にあるカデシュのメリバの水のほとりで私に背き、イスラエルの人々の間で私

を聖としなかったからである。そのため、あなたは私がイスラエルの人々に与える地を望み見るが、そこに入って行くことはできない」(申 32:52-53)とあり、明らかにモーセが約束のカナンの地に入れなかったことの原因となっています。40年間苦悩を重ねて民を導き続けたモーセは、エリコの東にあるネボ山・ピスガ山で、これから民が入るカナンの地を一望させてもらえますが、その地で死を迎えます。ちらっと(かどうかはわかりませんが)見るだけで入ることはできなかったのです。その時のモーセの年齢は一二〇歳ですが、定められた人のいのちの最大数です(創 6:3)。モーセは、最大数生きて、ベト・ペオルという場所に葬られます。たった一回のミスで、最終目標であった地点に到達できない。それは厳しすぎるお話と思えます。確かに、イスラエルの民の指導者として、多少の脱落者を出したものの、民を率いて一緒に約束の地に入る、それは人間の価値観からすれば成功・幸福の一つの形です。しかし、もしそのような価値観で見れば、ひとりの脱落者も出さないほうがよかったのでは、という反省も生まれます。それゆえ、見方を変えれば、たとえモーセがカナンの地に入れたとしても、それが成功・幸福とは言えないのです。厳しすぎる最後と言えますが、約束の地を眺めたモーセは、何が正義であり、また何が幸せであるのか、その尺度は主なる神様が持っている、それは人間を超えている、その事実を知って納得したのではないかと思います。そして、人間的な尺度や、人間的な喜びで傲慢になることや、人間的な悲しみでただ嘆いて終わることがないように、それらを超えるために主なる神様は自分たちに律法を与えられた、だからこそそれを守ることで主なる神様の愛に応えることが大切だと自覚したのだと思います。

この主なる神様の愛に応えること、この歩みは、主イエス・キリストを通して教会に集められるわたしたちも同じです。本日の箇所ではイエス様は「あなたがたが私を愛しているならば、私の戒めを守るはずである」(ヨハネ 14:15)と語り、「弁護者」(聖霊)を送る前提について語っています。イエス様の掟とは、互いに愛し合うことです。イエス様は、13章34節で、「あなたがたに新しい戒めを与える。互いに愛し合いなさい。私があなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」と述べていました。イエス様は、天地のすべてを想像された主なる神様が、そのすべてを愛しておられるのだから、その方を愛し、同様に、イエス様を愛し、そして人間同志愛し合うならば、聖霊を遣わしと約束しているのです。その聖霊が働く限り、人間的思いや判断がいかなるものであっても、主なる神様が良い方向へと導いてくださいます。

今年ももうすぐ聖霊降臨日を迎えます。これからも礼拝から祈りつつ、聖霊がより深く私たち一人ひとりに、そして世界に吹くように求めたいと思います。そしてその聖霊を受けつつ、互いに大切にしよう歩みを皆さんと共に、続けていきたいと思えます。